

「神奈川自然誌資料」の25年間を振り返って

第25号編集委員長 高桑正敏

「神奈川自然誌資料」も今回で25号を迎えることとなった。「赤い表紙」というイメージのもとに、神奈川県内の自然誌研究の一時代を築き上げてきたと自負したい。

その「神奈川自然誌資料」を立ち上げた中心人物は、当館の元学芸部長であり、第1号の編集委員長であった中村一恵さんであった。その中村さんも25年という記念の時を迎えたいま、当博物館の学芸員としての任を終えようとしている。奇遇と言うべきであろうか。さらに言うのであれば、第1号の巻頭論文は奇しくも私による「神奈川県の昆虫相の特性とそれを支えてきた要因」であった。当時の私は県立博物館の外にいたアマチュアだったのに、思いもかけず本誌の25年を振り返る立場になっている。このこともまた、まったく奇遇としか言いようがないであろう。

個人的な感傷はそれまでにして、これまでの「神奈川自然誌資料」を評価したい。

第1号の編集後記には次のように記されている。『神奈川の地史的、生物的自然が近年どのような変貌をとげ、どのように変化しているのか、それは部分的にしか明らかになっていません。部分を見ること、知ることによってでも問題点の所在は知ることができます。それには、自然誌としての記録を着実に積み重ねていくしかないと考えます。このような観点を本書発行の出发点にしたいと思います。現在の、あるいは過去の神奈川の自然について真剣に考える人が一人でもふえ、その礎を提供することに少しでも役だつことができると考えております。そして、今後どうしたらよいかは、ひとり自然科学の問題としてではなく、人間自身の問題として取り組んでいく必要があります。自然と人間の関わり方はまさしく文化の問題であると考えます。今後のご支援とご協力をよろしく願います。(中村一恵)』まさに「神奈川自然誌資料」の目的と役割がここに述べられている。そして、総目次にあるように、それは十分に達成されてきたと認めていただけるだろう。なおかつ、次世代に対する本誌の役割もまた、継続の途にある。移入種問題をはじめとしたさまざまな課題に直面している私たちとしても、第1号の気概を改めてかみしめる必要があるだろう。

「神奈川自然誌資料」のもう1つの役割は、アマ

チュアや若い研究者にとっての登竜門的な存在であったと聞く。審査のきびしい学会誌をめざしたのではなく、研究者を育てる雑誌をめざしたのだ。このために、編集委員はそれぞれに大変な努力を重ねてこられたようである。実のところ、投稿原稿の中にはその不備ゆえに、掲載の可否をめぐっている議論になったものもあった。しかし、編集委員会の趣旨はそれを拒否することではなく、いかにして掲載可能な論文に仕上げていくかであった。それゆえに、編集委員の皆様には誌上には現れない努力が多々あったはずである。このことに改めて敬意を表するとともに、お礼を申し上げる次第である。

ところで、「神奈川自然誌資料」は当初、文部省(当時)の博物館活動補助金を得て発行されていたが、第4号からはそれが打ち切りとなって県立博物館の負担となり、現在に至っている。もちろん、県内の自然誌研究のセンター的位置を担う立場としては、県費負担は当然のことであろう。しかし、1990年代前半にはバブルも崩壊し、年を追うごとに県財政が厳しくなっていく中で、本誌の発行予算を獲得するのも困難な状況になりつつある。博物館外部の編集委員に対するわずかばかりの経費も、最近は1人1回分しか確保できなくてますますボランティア同然となっている。さらに恥をしのんで暴露すれば、本誌は研究報告とともに当館の基礎研究費から捻出されているが、それは学芸員の研究費を削ってのものなのである。しかも、その学芸員の研究費もいまやほとんどゼロとなってしまっている。実は25号の節目を迎えるに当たっては、それなりの記念号にしたかった。しかし、費用的に望むべくもない。これまでの総目次を掲載することでお許しいただければ幸いである。

残念ながら、県費での今後の発行には限界があるのは否定できない。しかし、「赤い表紙」で親しまれてきた本誌の果たす役割は、創刊時にまして大きいものを感じる。それゆえ、私も編集委員会としては、その継続にあらゆる可能性を探っていくべき決意を新たにしている。神奈川県自然誌解明を願う皆様方には、今後いっそうのご支援をいただきたく、お願い申し上げる次第である。

(神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸部長)